

私の夢、それは北海道に行くこと

神奈川県立三浦初声高等学校 園芸科学科 2年 樋口 のぞみ

私は、いま農業高校の2年生です。将来北海道に行って酪農ヘルパーとして働きたいという夢を持っています。でも、とっても不安があります。それは、腰に大きなケガをしていることです。

小さいころから動物が好きだった私は、高校を選ぶときに動物にかかわることのできる学校を探しました。母に相談したところ、いろいろ調べてくれて、平塚農業高等学校初声分校（現在の三浦初声高等学校）を見つけてくれました。園芸科学科ですが和牛を2頭飼育しており、畜産についても勉強できるというところが魅力でした。実際に体験入学に行き、ウシのエサの調合をやったり、ウシと触れ合ったりしてどんどん「ここで勉強したい」という思いが高まってきました。また、家からの通学も無理がないこともあり、決めました。

入学してから、総合実習で実際に和牛に触れました。さらに、エサに含まれているいろいろなものの特徴やウシの触り方、堆肥の処理、耳についている黄色いタグ、耳標といますが、これに書いてある10桁の登録番号によって日本中のウシが管理されていること、和牛の4つの種類のこと、畜産の歴史、畜舎の消毒のことなどたくさんのことを学び、私の学校選びは間違っていなかったと思いました。

去年の6月に、3年生の畜産研究部の部長が農業クラブの校内大会で酪農ヘルパーに関することについて意見発表をしました。それを聞いて、「ウシとかかわるにはこういう仕事もあるんだ、私もやってみたい」と思い、将来の夢が決まってきたような気がしました。両親にその夢のことを話したのは12月のことです。学校でおこなわれる進路学習会がきっかけで将来の夢について話したのです。私の夢を聞いた両親は、私がびっくりするくらい反対しました。それは、私は腰に大きなケガを抱えているからです。

中学2年生の夏に、部活動の練習をしている時にゴキツという嫌な音がして腰に違和感を覚えました。そのときは「たいしたことないや」と思ってそのまま練習を続け、家に帰りました。その夜くらいから痛みがどんどん大きくなり、夜間救急外来に行くほどでした。病院では、レントゲンくらいでははっきりしたことがわからないと言われ、日を改めてMRI検査を受けました。すると「第4腰椎疲労骨折及び腰椎分離症」という耳慣れない病名で診断されました。つまり、腰椎が圧迫骨折のような状態にあるということです。しかも、今できる治療はほとんどなく、成長期が終わってから手術をしてボルトで固定し、一生そのままだということでした。現在は緩和ケアで腰の痛みを和らげるためのリハビリテーションに通院しています。

そんな私の体のことをよく知っているので、両親は「酪農ヘルパーなんてとんでもない」、「腰が悪いのに酪農ヘルパーができると思っているの?」、「体のことをよくわかっていない

のではないの？」などと大反対をしたのです。でも、私の決意は変わりませんでした。せっかく農業高校に入学して勉強しているのでそれを生かしたいこと、ウシに出会ったことでそれまで不安だらけだった自分の将来に希望が持てたことなどを粘り強く説明しました。1週間以上も続いた話し合いで「どうしてもウシにかかわりたい」という私の強い意志をわかってくれて、「親と医者 of 言うことを絶対に守ること」を条件に酪農ヘルパーへの道を認めてくれました。言い出したら聞かない私の性格を一番よくわかってきているのも両親だったのです。

現在、私は自分の体の状態を常に意識しながら学校での実習をしています。中腰にならない、どうしても中腰の姿勢が必要な時は片膝をつく、自分の腰に悪影響のない重さを意識して荷物を持つ、長時間同じ姿勢でいない、などです。

家が農家の同級生から話を聞くと、農業と腰痛は切っても切れない縁があるようです。私は、自分の腰に負担がかからない方法を考えることで、もしかしたらいろんな人の役に立てるかもしれないと思い始めています。常に腰に心配のある私なら、腰に負担のかからない方法を思いつくかもしれない。腰に負担のかからない手順を考えられるかもしれない。腰の負担が少ない道具を作り出せるかもしれない。そう思うのです。

昨年度末より畜産研究部に入りました。学校で飼育している黒毛和種のエサ(オカラを主原料にした発酵飼料)の調製や、ブラッシング、掃除、堆肥の切り返しなどを通して家畜の取り扱いの基本的なことを学んでいます。最近、地域の酪農牧場で小学生対象の酪農体験があり、部活動の一環でその酪農体験のお手伝いをする機会がありました。参加した小学生の中には、牧場に来るなり「くさい」とにおいを嫌がっていた子がいました。しかし、エサをやったりブラッシングしたりしてウシと触れ合うことで生き物の温かさを感じ、ウシに親しみを持つことで「いいにおい」と言いながら帰っていったのです。そんな子供たちを見て、私はあらためてウシの魅力を発見しました。ウシは素晴らしいんです。ウシにはすごい力があるのです。

酪農体験の後に、緬羊の毛刈りをやらせていただく機会もありました。でも、腰に不安のある私はほとんど見ていないことしかできませんでした。とても残念でしたが、でも、それが私の持ち味なのだと思いを納得させました。できることとできないこと、難しいことをきちんと判断することは両親との固い約束の一つでもあるのです。

私の体は酪農ヘルパーとしてきちんとやっていける状態なのかと思うと不安があります。でも、それでも酪農という産業に携わっていきたいのです。直接乳牛といつでも触れ合う酪農ヘルパーという職業に就きたいのです。私は、いつでも腰のことを意識して酪農ヘルパーをやることで、どんな人でも安心安全な酪農の作業をみつめることになると思っています。これまで当たり前だった作業の中から体への負担を軽減するという視点で改善できることを見つけられると思っています。

これからの学校生活でも、自分の体に注意しながら、自分のケガとうまく付き合いながら、より負担の少ない農業のやり方、畜産のやり方を考え、私らしい、私にしかできない酪農ヘルパーへの道を歩んでいきたいです。
